

VERSION JAPONAISE

「あ、鳴った。」

と言って、父はペンを置いて立ち上る。警報くらいでは立ち上らぬのだが、高射砲が鳴り出すと、仕事をやめて、五歳の女の子に防空頭巾をかぶせ、これを抱きかかえて防空壕にはいる。既に、母は二歳の男の子を背負って壕の奥にうずくまっている。

「近いようだね。」

「ええ。どうも、この壕は窮屈で。」

「そうかね。」と父は不満そうに、「しかし、これくらいで、ちょうどいいのだよ。あまり深いと生埋めの危険がある。」

「でも、もすこし広くしてもいいでしょう。」

「うむ、まあ、そうだが、いまは土が凍って固くなっているから掘るのが困難だ。そのうちに、」などあいまいな事を言って、母をだまらせ、ラジオの防空情報に耳を澄ます。

母の苦情が一段落すると、こんどは、五歳の女の子が、もう壕から出ましよう、と主張しはじめる。これをなだめる唯一の手段は絵本だ。桃太郎、カチカチ山、舌切雀、瘤取り、浦島さんなど、父は子供に読んで聞かせる。

この父は服装もまずしく、容貌も愚なるに似ているが、しかし、元来ただものでないのである。物語を創作するというまことに奇異なる術を体得している男なのだ。

ムカシ ムカシノオ話ヨ

などと、間の抜けたような妙な声で絵本を読んでやりながらも、その胸中には、またおのづから別個の物語がうん醸せられているのである。

こぶどり

瘤取り

ムカシ ムカシノオ話ヨ

ミギノ ホホニ ジャマツケナ

コブヲ モツテル オヂイサン

このお爺さんは、四国の阿波、剣山のふもとに住んでいたのである。というような気がするだけの事で、別に典拠があるわけではない。もともと、この瘤取りの話は、宇治拾遺物語から発しているものらしいが、防空壕の中で、あれこれ原典を詮議する事は不可能である。(…)私には、読んだ本をすぐ人にやったり、また売り払ったりする癖があるので、蔵書というようなものは昔から持った事が無い。それで、こんな時に、おぼろげな記憶をたよって、むかし読んだ善の本を捜しに歩かなければならぬはめに立ち到るのであるが、いまは、それもむずかしいだろう。私は、いま、壕の中にしゃがんでいるのである。そうして、私の膝の上には、一冊の絵本がひろげられているだけなのである。私はいまは、物語の考証はあきらめて、ただ自分ひとりの空想を繰りひろげるにとどめなければならぬだろう。いや、かえってそのほうが、生き生きして面白いお話が出来上るかも知れぬ。などと、負けおしみに似たような自問自答をして、さて、その父なる奇妙の人物は、

ムカシ ムカシノオ話ヨ

と壕の片隅に於いて、絵本を読みながら、その絵本の物語と全く別個の新しい物語を胸中に描き出す。

太宰治「お伽草紙」(1945)

警報 : alerte; 高射砲 : canon antiaérien; 防空壕 : abri antiaérien; 瘤 : bosse; うん醸 : fermentation